

<レポート>

NPO と大学のコラボレーションの試み

PAGE2 「スマ学実行委員会」 佐藤 隆三 ・ 野村 和



武蔵野短期大学学生による“手遊び指導”

育じい 育ばあ 講座

公開講座や社会人入学により大学の機能を地域社会に開放する「大学開放」の取り組みにおいて、地域団体と大学の公開講座の連携が一つの重要な課題となっている。その考え方は、地域住民を対象とする大学の公開講座は「コミュニティにおける知の拠点」としての大学が果たすべき機能・役割であると同時に、今日の大学に求められている社会貢献活動の重要な一部であるというものである。大学の公開講座が意義あるものとなるためには地域団体（自治体）との連携が不可欠であることは論を待たない。講座のテーマが地域の実情にマッチしているか、住民のニーズに適合しているかといった問題に答えるためにも、また受講者の募集などのためにも、地域団体と大学との協力関係が求められ、大学公開講座を両者の連携で作りに上げていく必要がある。

市町村などが公民館等で実施する各種講座に大学が協力する「出前講座」などはすでに各地で実践されている。しかしそれらはあらかじめ設定された学習テーマに応じた大学からの講師の派遣であって、必ずしもテーマの設定等の講座づくりにまで大学が関わっているわけでもない。こうした点に照らせば、両者の協力、連携といっても、大学が外に出て行く場合にも地域の実情にマッチしたものをつくり出すことは、なかなか容易でないのが実情ではないだろうか。大学開放にあっては、内における公開講座と外における各種の学習講座における両者のより緊密な連携が求められる。

ところで「地域団体」とは通常はもっぱら県、市町村といった行政が念頭に置かれている。行政は公民館での講座を始め各種の学習講座を展開しているが、地域における学習講座はそれだけではない。各種の NPO、市民団体等が地域住民を対象としての多面的な活動の一環として多様な形での講座を実施している。そうした講座では大学教員を講師に招くケースも多いが、それら団体と大学が必ずしも緊密に連携しているわけではない。したがって、大学がその機能と役割を果たし地域社会への貢献をしていくためには行政との関係だけでなく、地域における各種団体による学習活動との連携も忘れてはならない重要な課題であると同時に、各種団体も実施する講座を有意義なものとしていくために大学との関係を深めていく必要があると思われる。

こうした観点から、NPO と大学のコラボレーションにより地域における学習講座を組み立て実施した一つの事例を紹介する。ここで言うコラボレーションとは単なる出前講座のような形に止まらず、講座の企画・立案から実際の運営に至るまで NPO と大学が一体となって取り組む形を意味している。

1. はじめに

東京都東村山に所在する特定非営利活動法人 PAGE 2 (以下 PAGE 2 という。)は、2014 年 4 月からそれまでの団塊の世代の社会参加を目指す任意団体「懇団塊」を改組し NPO 法人化し、地域づくり、仲間づくりのための諸活動を行ってきた。具体的には市民団体や行政とのコラボレーションを図りつつ、起業をも視野に入れた「手づくり小物雑貨市」、ひと味違った「歌声喫茶 (おと・うたカフェ)」、名画を楽しむ「映画サロン」、音楽で人とまちをつなぐ「まちジャム」、お年寄りから子どもまでが楽しめる「ふれあい石取りゲーム」、周辺 4 市との「多摩団塊交流会」などの取り組みを進めてきている。その一環として、共に語らい学習し交流する場として「スマイル大学」(略称 スマ学)を始めることとし、2015 年に第 1 回を開催した。

スマ学として第 1 回のテーマは「ともに語らい交流する「基地」。そして将来地域でできることを自己発信しよう」で、地元の著名なジャーナリスト豊田直巳氏など 3 名の地元の講師による講座を行い、第 2 回は「学ぶ・歩く・繋がる」をテーマに、講演とともに里山歩き、まち歩き、野花の探索 (お花見) を実施し、第 3 回は「暮らし、つながる この街で」をテーマに地元で運行する「銀バス」、子育ての実践活動、街の活性化の取り組み、についての講座であった。各回ともに東村山市および教育委員会の後援を受け、市報での PR のほか公民館等でのチラシの配布等を行い、それぞれ参加者は市内在住の方を中心にそれぞれ約 25~30 名であった。

当初、スマ学では住民による住民のための学習の場という見地から、市内には優れた経験、学識を有する方々が多数在住しているので、そうした方々を講師として活用し、受講者にはそれらの方々の諸活動を通じて地元を見直す機会と諸活動への参加のインセンティブを与えることを狙いとした。したがって第 2 回までの講師はすべて市内在住の方々であったが、第 3 回においてはより広い見地が必要であるという考えから、市内在住ではないが市行政にも関わりのある日本社会事業大学の菱沼准教授に基調講演をお願いし、それを受けた形で、地域での諸活動を実践する地元の方々による講演とパネルディスカッションを行った。

2. 大学のない東村山市

こうした経緯をふまえ、第 4 回のスマ学の検討を行った。そこでまず問題となったのは、社会事業大学（清瀬市）菱沼准教授を訪問したときキャンパス周辺には若者が多数いて大いに活気を感じられたのであったが、それに対し東村山市には大学がなく若者の集まる場がないと気づいたことである。大学がないことは若者の集まる場がないだけでなく、企業や行政が大学の有する知的資産を活用することができず、地域の活性化、発展という視点から大きな問題である。のみならず、大学へ進学できなかった、さらに学びたい、という方々が市内には多数おられるはずであるが、そうした方々は市外の大学へ時間とお金をかけて通うしかない。もちろん今の時代に新しく市内に大学を作るとは非現実的であるとすれば、周辺の大学と協定を結び大学の教員による大学のカリキュラムに準じた講座（たとえば、半年間同一テーマでの複数の講義）を「東村山大学」というような形でスマ学を発展的に拡大し開設してみてもどうかと考えた。そうすれば、①市民の方々は専門的な学習の機会を身近に得られるとともに大学の知的雰囲気を感じることができる、②講座を大学の認定講座にすれば、実質的に大学を市内に設置するのと同じ効果がある、③そうした講座の積み重ねは長期的には人的な関係等を通じて市と大学との関係あるいは連携を強化していくことになる、④企業向けの講座を組み込むことにより、市の産業発展に資することができるし企業と大学の関係づくりの一助ともなる、⑤連携する大学にとっても社会貢献の実績づくりになるし、受講者が大学に社会人入学するきっかけとなるなどのメリットがある。

しかしながら、一般的に行われている 1 回限りの講座（あるいは月数回の講座）ならばともかく、こうした大がかりな講座（主に、連続講座）を設定し運営するとなれば 1 NPO だけでは不可能であり、大学との協定をはじめ財政的にも受講者の確保（PR）さらには会場確保のためにも市行政との連携、とりわけ行政による支援が不可欠である。その場合の行政は当然のことながら教育委員会であるので、このような考え方に基づいて市の教育委員と非公式ではあるが話し合いをしてみた。しかし「大学のない東村山市」という問題意識さえ受け止めていただくこともできなかった。そこでやむを得ずスマ学としては行政に

頼ることなく独自に大学との連携の下での講座に取り組んでみようということになった。

3. 「育じい 育ばあ 講座」

そこで、近隣（埼玉県狭山市）の武蔵野短期大学（以下「短大」という。）の野村教授に相談した。野村教授とはたまたま既知の関係にあったが、生涯学習の専門家であり、しかも短大の副学長でもあることから、スマ学を大学との連携においていかに構成するかを相談するには最適の方であった。相談をさせていただいた結果、野村教授にはスマ学の趣旨を直ちに理解され、新たに求めている大学とのコラボレーションにも賛同していただき、第 4 回となるスマ学に全面的に協力していただけることとなった。

そうした前提で第 4 回のスマ学としてどのようなテーマで講座を組むかについて PAGE 2 と短大とによる検討に入った。まず第一に提起された問題は、これまでスマ学が目的としていた地域づくり、仲間づくり、すなわち仕事や育児に追われ地域をかえりみることのできない、いわば現役世代の市民を地域に目覚めさせ地域活動への参加を呼びかけるという考え方は、もはや放棄してはどうかということであった。スマ学はもとより、全国的にもこれまでの多くの学習講座がそうした目的で現役世代の人びとに呼びかけて開催されてきたが、参加者はほとんどが高齢者が中心であって現役世代の参加はほとんどなかったといつてよいほどであることが指摘された。現役世代は以前も仕事や育児に追われ地域などを振り返って見る余裕のない生活を送っていたが、現在では雇用環境等の変化によりますますたいへんな状況に追い込まれている。そこで、社会参加が求められる地域の諸問題（子育て支援、環境美化等）への対応は高齢者が引き受け、現役世代は後顧の憂いなく自分自身と家族のためにがんばってもらうというように思い切った発想の転換が必要ではないかということで、新たなスマ学では対象を元気な高齢者の方々を中心に組み立てることとなった。ただしこうした発想では、現役世代がかつての会社人間以上に政治をはじめとする社会活動への参加に対して無関心になることを助長する懸念がないわけではないが、それはこうした講座とは別な次元の問題であると割り切る必要がある。さらに、高齢者を中心に据えた講座を開設し、それにより高齢者を中心とする地域活動、社会活動の環が広がれば、それはとりもなおさず現役世代が高齢者となったときに参加できる活動の受け皿になり、世代間の循環を図る一助となるに違いない。

そこで第 4 回のスマ学のテーマは、元気な高齢者が地域において若い人の子育てをサポートするための基本的な考えを学ぶ「カッコいい育じい育ばあのための講座」（「育じい育ばあ講座」）とし、地域における子育て支援の活動へのいわば入門編とすることとした。

そこで第二に提起された問題は、企画段階でのコラボレーションは以上のとおりであるが、この講座を PAGE 2 と短大のコラボレーションとして、具体的にはどのような形で運営に取り組むかであった。議論の結果、野村教授がコーディネーターとなって講座を統一的に運営し、講座としての講師には短大の教員を確保するとともに、PAGE 2 はパネルディスカッションのパネラーとして地元の関係者を確保する、講師謝金は些少なから PAGE 2 が負担する、会場は PAGE 2 が準備する、という役割分担で取り組むこととなった。こうした合意に基づき PAGE 2 の理事長名で短大学長宛に共催の要請文書を提出し同意を得た。

講座は 6 月 16 日 (土) から 7 月 7 日 (土) までの毎週土曜日の午後 3 時から 5 時まで 4 回にわたっての連続講座とし、具体的には以下のとおりである。

第 1 回目 『育じい育ばあ意識改革！』

コーディネーター 短大副学長・教授 野村 和
ゲストスピーカー 短大附属幼稚園園長 酒井幸子

第 2 回目 『読み聞かせ名人と呼ばれたい』

コーディネーター 短大副学長・教授 野村 和
ゲストティーチャー 短大教授 岡澤陽子

第 3 回目 『子どもたちの集まる場所に出かけよう！』

コーディネーター 短大副学長・教授 野村 和

第 4 回目 『育じい育ばあ地域貢献』～パネルディスカッション

司会進行 短大副学長・教授 野村 和
パネラー NPO 法人 PAGE 2 理事 軽部 孝夫
NPO 法人 HUG 子どもパートナーズ 理事 鈴木千佳子

なお、PAGE 2 は従来から東村山市との関係では各種市民団体の窓口である市民部市民協働課に依頼し、各種事業に対し市の後援を受けるほか公民館等への PR チラシの配布、会場の確保等の協力を得てきた。そこで今回も同様の依頼をし「育じい育ばあ講座」は市の後援事業とした。しかし従来行われてきた教育委員会の後援は受けず、新たに東村山市社会福祉協議会の後援を受けることとした。

4. 運営内容

1) 大学とのコラボレーション

講座全体を通じて野村教授がコーディネーターとして取り仕切るとともに、大学教員がゲストスピーカーあるいはゲストティーチャーとして講義・講演をするほか、短大の多数の学生がボランティアとして受け付け補助、司会を担当した。そのようにしてこの講座が

NPO と大学とのコラボレーション企画であることが受講者に直接体感できるものとなった。毎回の講座では受講者を数人ずつのグループ分けし、そこに講師や学生も加わって講義等を踏まえてディスカッションをするという、これまでできなかった形を取ることができたのはスマ学にとっては大学とのコラボレーションの大きな成果であった。

第 3 回目は野村教授による専門的な児童教育論の講義であった。多少難しい内容であったかもしれないが、受講者にとっては大学の授業に準じた形での講義を受けることで、通常の講座に見られるような「耳学問」的な講演ではなく、大学の知的・専門的な雰囲気や体得する良い機会になったものと思われる。こうした要素を組み込むことができるのも、大学とのコラボレーションの大きなメリットであった。

2) 世代間の交流

多数の短大生がボランティアとして参加し、講座の司会や受付補助を担当したほかグループ・ディスカッションにも加わった。さらに、毎回の終了時には学生の指導で「手遊び」の紹介と実技指導がされた。こうしたことで、単に若い世代が講座の中にただ「存在」するだけではなく、受講者である高齢者が直接若い世代と触れ合うことができ、それまでのスマ学には見られなかった講座自体の活性化が図られ、受講者のアンケートによってもきわめて好評であることが示された。一方ボランティア学生にとっても講座の司会を担当したり、グループ・ディスカッションに加わり高齢者と直接触れ合うことで、多くのことを学ぶことができたと思われる。なお、当初、若者のセンスを活かそうと講座の PR 用のチラシを学生に制作依頼し提案されたものの、プロの目から見て採用はされなかった。

このように、高齢者を中心とする講座であっても、そこに若者が直接関与することで講座自体が著しく活性化することが改めて認識されたのであった。

5. 今後に向けて

1) 大学との関係

今回のコラボレーションが成立したのにはたまたま野村教授とは既知の関係にあったという人的な要素がきわめて大きい。本来は NPO と大学が対等な立場で話し合った上で協定を結び、協定書に従ってそれぞれの果たすべき役割を明確にした上で具体的な講座のあり方や内容を詰め、実際の運営に当たることが望ましい。しかもそのようないわばモデル協定書ができれば、他の大学とも同様の協定に基づく協力・連携関係を築くことが容易になり、特定の分野以外の講座を多くの大学とのコラボレーションにより広く展開できるようになる。今回は時間的余裕もなく、またその必要性は必ずしもなかったもので、そのような協定書の締結までには至らなかったが、少なくとも今後における大学との協力・連携のあり方についての基本的な考え方は得られたものと考えている。

2) 行政との関係

今回の講座では市民協働課との関係以外には市の行政とは直接に関わることはしなかった。子育てに関わる講座であったにもかかわらず、会場には市の児童関係部局からは誰も来ておらず、受講者の一部からは、「市の行政とはうまくいっていないのではないか？」という声もあった。たしかに市の後援を受けている講座でありながら市の担当部局が講師陣にはもとより受講者としても参加していないのは奇妙に見えるかもしれない。ただ今回の講座は大学とのコラボレーションを中心課題としていたため、そこまでの配慮に欠けた面は否定できないが、行政との関係を深くすれば講座のテーマが行政課題に縛られたり、内容がチェックされたりする懸念がないわけではない。PAGE 2 は個別事業で市やその他から補助金を受けることもあるが、特定の財政支援を受けないことから自由な講座の組み立てができる。それでも地域の諸問題を取り上げて講座を設定するとすれば当該問題を所管する行政部門、場合によっては議会との関係は無視できないことは間違いない。逆に言えばそのような関係が望ましい形で形成されるとすれば行政とのあるべき「協働」関係が生み出されることとなるのであって、そうした方向を目指す必要があると思われる。そうした中で大学-行政-NPO の関係をどのように形作っていくべきか今後の課題の一つであろう。

3) 受講者

今回の受講者は第 1 回目から第 4 回目を通じて約 25~30 名であり、これまでのスマ学の受講者と同様、すでに地域での諸活動に関わっておりこうした講座への関心が高い方々が大多数であった。いわゆる現役世代の参加は皆無で、これは当初から織り込み済みのことであった。講座修了後に実施したアンケートによれば講座自体の評価は良好で、特に学生ボランティアの参加により活気ある講座となったことが評価されている。

4 回の連続講座については「ちょうど良い」というのが大勢であり、たとえば大学の講義のように 15 回の連続講座というような本格的なものは、受講者の多くが各種の地域活動に携わっていることから見て、当面は時間的に無理かもしれないと思われる。それでも折角の大学とのコラボレーションであるからには、回数だけではないにしても、受講者が少しでも大学の知的・専門的雰囲気を感じ知識を高めることができるようにするための工夫が必要であろう。その点で第 3 回目の野村教授による講義は有益であった。

4) 学生ボランティア

学生ボランティアに期待したことは、高齢者が中心の PAGE 2 では今の時代にあった斬新なアイデアがなかなか生まれないので、具体的には若い学生のセンスを活かした PR 用のチラシを作って欲しいこと、人手不足のため講座運営に当たって司会、受付等を担当して欲しいこと、であった。野村教授の尽力により毎回多数の学生ボランティアが参加する

など大いに期待に応えてくれたが、そこには期待以上のものがあった。すなわち若い学生の参加により講座自体が生き生きとした雰囲気に入れられ、特にグループ・ディスカッションや学生による「手遊び」指導を通じて世代間の直接的なふれあいが実現したことはきわめて意義深いものがあったと思われる。大学とのコラボレーションでは教員との協働だけではなく学生との協働も欠かすことのできない重要な要素であると実感させられた。

おわりに

「東村山スマイル大学・武蔵野短期大学コラボ」と銘打った「育じい育ばあ講座」は一応成功裏に終了した。課題はこの実績をどのように今後につなげていくかである。当初は、講座による成果としての受講者の子育て支援活動を踏まえて、将来は東村山市における「子育てフェスティバル」のようなイベントにまで発展させることも構想されたが、そのためにはこの講座の継続が不可欠に思われる。僅か4回の講座で「カッコいい育じい育ばあ」が作り出されるはずはなく、もう一歩も二歩も踏み込んだ講座が必要であろう。その「踏み込み」は今回のテーマをより深く追求していくか、あるいはテーマの幅を広げていくか、ということになると考えられるが、いずれも専門家集団ではない PAGE 2 には荷の重い事柄であり、専門家集団である短大に期待するほかはなく、そこにいっそうのコラボレーションに向かっての相互協力が求められる。(佐藤 隆三)

「カッコいい育じい育ばあのための講座」を開催して

はじめに

平成 30 年度に実施された「カッコいい育じい育ばあのための講座」は、講座形式や内容は従来行われている子育て支援講座等と大きな違いはないものの、対象者を高齢者に絞った点や、NPO と大学が協力して講座を作り上げ地域に提供した点などにおいて、新たな試みであった。詳細は前記にあるとおりであるが、今回の事業を共催した大学側の立場から振り返っていきたいと思う。

1. 問題意識と講座の目的

NPO 法人 PAGE2 の最初の相談の前提として、これまでの活動に若年層の参加が少ないことへの危機意識があった。筆者が関わる社会教育活動の中で高年齢の方々は必ずと言っていいほどこの点を問題視する。これまでも同じような相談を受けることが多かった。しかしながら、この問題意識の根底にあるのは地域づくりの手法や地域のあり方が現状のまま継続されなければならないという思い込みであるというのが筆者の基本的な考え方である。世代よっての価値観の相違やライフプランの変化なども関連しているだろう。急激な社会変化と技術変革によって、今後はさらに市民の地域とのつながりに関する意識やコミュニティに求める役割が変化するかもしれない。その中で、高年齢層が期待する地域への関わりを若年層に求めるのは現実的ではない。あらゆる世代が地域づくりに関わることを理想とするのは良い。しかし、その理想に取りつかれたように実現性の低い議論を重ね、苦慮するよりは、その理想のために今できることを考えてみる視点も必要であると考え。今回は若者を地域に呼び込むための議論を一度離れ、むしろ地域と地域づくりに関心の高い層で、若者のための地域を作るという視点を提案した。それが実現したのが「カッコいい育じい育ばあのための講座」であった。高齢者が地域で若者に支えられ、守られる側ではなく、逆に若者を支え守る側になるという発想の転換である。これはもちろん、地域づくりに若年層が必要ないということの意味しているわけではない。高齢者が自分たちの考える地域の在り方を若年層に押し付けるのではなく、若年層が住みやすい地域を考えることで、今後の地域づくりがどう進められるべきかを考え、意識を変えることを目的としたものであった。テーマを子育て支援に定めた理由は、若い世代で地域への期待が高いのが子育て支援であるという点が第一にある。また、筆者が保育者養成校に勤務しているため、コーディネーターが容易である点も理由である。勤務先の関係で子育て支援に関する講座に関わることがこれまでもあったが、こうした講座はむしろ子育て世代や保育に関わる人が集まる講座であり、高齢者の参加が少ないといった経験も、高齢者に限定した子育て支援講座は新たな切り口であると感じた理由であった。

2. 講座の内容とその成果

講座内容に関しては、武蔵野短期大学が共催となって大学の教授陣に協力をお願いした。今回、講師を引き受けていただいた 2 名のうち酒井教授は本学附属幼稚園での園長を長くお勤めいただいている。自身の子育ての経験もあり、また幼稚園の先生方が子育てをするのを見守り、現在園児の保護者の育児の相談も受けている、まさに 3 世代の子育てを知っている講師である。もう 1 名の岡澤教授には、育じい育ばあのための読み聞かせ講座をお願いした。岡澤教授は絵本研究を専門としていて、短期大学でも学生に向けて児童文化、特に絵本の読み聞かせやストーリーテリングの実技などの指導の経験が豊富である。

初回の講義では、酒井教授から高齢層と現在子育てをしている育児世代との経験や価値観、感覚の違いをお話しいただいた。ご自分の経験だけではなく、本講座のために子育て世代への聞き取りやアンケートなども実施し、その結果も踏まえてのお話しであった。特に現在の子育て世代から高齢層への要望や厳しい意見などは、受講生から悲鳴に近い声が上がるといった。同時に、若い世代が高齢者を頼りにしている点、感謝している点なども強調された。初回の講義として、高齢者に「若い人の立場」にたって子育て支援を考えるという意識を持ってもらいたい、そして、自分が支える側に立つという気持ちに変わってもらいたいという意図を踏まえた講義であったと思う。

第 2 回は、若い人を支える立場としての専門的な技術を身に付けるということで、岡澤教授から絵本の読み聞かせの実技指導が行われた。参加者が好きな絵本を持ち寄って、グループごとで読み聞かせを実施し、相互評価をする形式であった。この講座は専門的技術を習得するよりも、書店や図書館の絵本コーナーに足を運んでもらい、今の子どもたちが触れている文化を実感してもらおうと同時に、自分でも子育て支援が「できる」という意識を持ってもらうことが目的である。実際に、保育所や子育て支援センター等で読み聞かせをする機会はなかなかないが、それを想定して集団を相手にした読み聞かせを実践した。参加者それぞれが、自分好みの絵本をあらかじめそれを紹介しあいながら、学生スタッフも混じるグループメンバーを前に様々な工夫をして絵本を読む時間を楽しんだ。

第 3 回は、地域に目を向けることを目的とした講座である。当初は、体験が必ず入った方がよいという中で、地域の子育て支援施設の見学を予定していたが、日程等の関係でそれがかなわず講義形式での実施となった。前半は、筆者から子供の成長にとっての環境の重要性という内容の授業を行った。短期大学で実際に行っているのと同じ内容であることを事前に告知することで、子供の育ちについての専門的学びを行っていることが意識できるようにした。後半は、東村山市の子育て支援の拠点となっている「コロコロの森」の HP の紹介と、そこから閲覧できる様々な子育て支援の情報について話した。特に子育て世代が選ぶ、市内の施設や飲食店などのランキングは事前に筆者が訪れておいて、スライドでその様子を紹介した。地域の子育て支援の実情や子育て世代の生の声が情報として共有されたことが有意義であったと思う。

最終回はパネルディスカッションを実施した。パネルディスカッションは、PAGE 2 からの強い要望で実現した。受講者が参加できる機会が必要であるとのことであった。講義の主旨を事前に打ち合わせてのものであり、参加者からの質問や意見も活発に出て大変良いディスカッションができた。しかし、様々な意見が出る中で、パネラーとの討議はある程度事前の打ち合わせを反映したものとなったため、グループ討議で自由に意見を出しても良かったかもしれないと感じている。

おわりに

今回の講義は以下の 3 点において有意義であったと考える。

まず、対象者を高齢者と設定したことで講座目的が明確となり、講義内容が充実した点である。対象者を限定することに、メリット、デメリットはあるだろうが、筆者にとっては経験したことがない程、参加者が同質であることで参加者のニーズをつかんでより実践的な講義ができたように感じる。子育て支援の講座に参加が少ない高齢者や男性に参加していただけたのも、成果の一つであると考えている。

次に、参加者を高齢者に限定するにあたって、世代間交流の一環として短期大学生のボランティアに参加をお願いした点である。今回は 1 年生が数名ずつ毎回参加をしてくれた。学生の司会進行が拙いことで、逆に場が柔らかくなり、参加者が協力して講座を盛り上げようという雰囲気も生み出していたように思う。また、毎回最後には学生から手遊びの実技指導を行った。参加者に、せっかく受講したのだから毎回お土産として、手遊びを一つ覚えて帰ってほしいと考えて実施したものだが、最後に声を出し、身体を使う活動を入れたことで、この手遊び実践は講義以上に受講生には楽しみな時間となったように感じる。今回の参加学生は、呼びかけに対して自ら手を挙げて参加をしてくれた学生だったため、意欲も高かったことがよかった。学生へのボランティア要請は大変多いが、今回のように主体的な参加が一定数のぞめることは少ない。今回は、テーマが学生の関心に沿ったものであった点や、参加日数が 4 回であり、隔週で参加がしやすかった点、学生への周知が早かった点などが参加につながったと考える。

さらに、NPO と短期大学との共催という今回の形は講座運営として理想的であったと考える。NPO PAGE2 はこれまでも地域に根差した活発な活動を展開しており、講座開催という実績も豊富であった。そのため参加者募集や講座運営などにその実績を発揮していただくだけではなく、講義企画にも市民の立場から積極的に意見を出して関わっていた。その中で、短期大学が共催という形で参加することで、一貫したテーマの中で複数講師が連携をとりながら、多様な要素を入れ込むことが可能となったと考える。外部講師を多く招聘した講座である場合、一連の講座をどう関連付けるかという点で、コーディネーターの手腕が問われるが、今回はその点で講座目的を各回ともに意識した講義を積み重ねることができたと考える。

蛇足であるが、今回の成功のもう一つの要因はテーマを「子育て」にした点であると考えている。当初は想定していなかったが、「子育て」というテーマがもつ未来志向性が、少なからず講座を盛り上げたように思う。地域について考える講座は、どうしても現在の問題点や課題から議論に入るため、受講者は下を向きがちとなる。しかし、「子育て」という

テーマが潜在的にもつ「前向き」な「明るさ」は、今回のように講座の目的そのものではなくても活用できるだろう。学習指導要領の改訂で学校にも「社会に開かれた教育課程」が求められている現在、地域創生は避けられないテーマである。その中で、現状維持ではなく、未来の地域をどうしたいのかを念頭においた活動が継続されていくことを期待したい。 (野村 和)

佐藤 隆三 (さとう・りゅうぞう)

1943 年、東京都生まれ。東京大学経済学部卒。厚生省入省、1996 年社会保険庁次長で退官。環境事業団理事を経て、東北文化学園大学医療福祉学部教授、2012 年 3 月退職。全日本大学開放推進機構会員。

野村 和 (のむら・なごみ)

1973 年、埼玉県生まれ。上智大学文学部教育学科卒、同大学院文学研究会博士課程後期単位取得満期退学。現在、武蔵野短期大学副学長。狭山市社会教育委員会議副会長、狭山市総合計画評議委員会副会長。共著：香川正弘・鈴木真里・永井健夫編『よく分かる生涯学習』ミネルヴァ書房、2016 年。